

■藤原三守 公卿。“蕃邸の旧臣”。出世限られる生まれながら、姻戚で嵯峨天皇に近侍して、右大臣までのぼりつめた。

ふじわらのみもり

藤原種継暗殺 785＝

阿波守藤原真作の五男(藤原南家の祖武智麻呂の曾孫・巨勢麻呂の孫)に生まれる。母は土師氏から出て近江の三井寺付近を本拠地とした秋篠氏一族御井氏の出。

藤原南家は既に藤原仲麻呂の乱や伊予親王の変などの政争によりかつての勢いを失っており、代わりに桓武天皇に重用された藤原式家が政権の主流に立っていたことなどから、父真作が従五位上・阿波守止まりであったように、めぐまれた家系ではなく、五男でもあったことから、出世の道はほとんどなかったが、

平安京遷都・ 794＝ 9歳：

蝦夷地平定・ 801＝16歳：この頃、姉妹の美耶子が藤原冬嗣と結婚、

・・・・・・ 803＝18歳：

性格は温恭であり、早くから大学に入って五経を学ぶなど、向学心も強かった上、後に嵯峨天皇となる神野親王の妃の一人となった橘嘉智子の姉安万子と結婚したことから、

桓武天皇没・ 806＝21歳

*東宮の蔵の管理を司る春宮主蔵正に任じられて、官界に一步を踏み出すと同時に、親王から特別の信任を得る契機となる。典侍として後宮に仕えた妻安万子にも支えられ、義兄冬嗣が親王の寵臣となって行くという幸運から、以後、急速に昇進し、

嵯峨天皇即位 809＝24歳：

嵯峨天皇が即位し嘉智子が皇后になると、一気に四階級昇叙されて従五位下となり、右近衛少将に任官。

葉子の変・ ・ 810＝25歳：

従五位上、内蔵頭、春宮亮、

・・・・・・ 811＝26歳：

その後も急速に昇進し、蔵人頭、

・・・・・・ 812＝27歳：

正五位下、

・・・・・・ 813＝28歳：

今度も桓武天皇の子良岑安世と同年齢で、従四位下となり、式部大輔、右兵衛督を兼任し、左兵衛督、

瘦雲集・ ・ ・ 814＝29歳：

但馬守。冬嗣が権大納言に進むと、良岑安世と同時に、異例の若さで参議に拔擢される。

文華秀麗集・ 818＝33歳：

妻安万子が死去、皇后の姉ということから、特別に従三位が追贈された。冬嗣が大納言になると、冬嗣が務めていた春宮大夫を引き継ぎ、

弘仁格施行・ 820＝35歳：

またも良岑安世と同時に、従四位上、

満濃池・ ・ ・ 821＝36歳：

良岑安世と同時に、従三位になるが、良岑が中納言になるも、権中納言に留まり、皇后宮大夫、

最澄没・ ・ ・ 822＝37歳：

天台・真言両宗の熱心な後援者であり、僧綱の強硬な反対に遭って難航していた最澄の大乗戒壇設立構想が、この年、勅許を得るに至ったのは、彼および藤原冬嗣・良岑安世・大伴国道らの尽力によるといわれ、大伴国道とともに初代延暦寺俗別当に任ぜられた。嵯峨天皇が譲位して淳和天皇が即位した後、新天皇に

嵯峨上皇・ ・ 823＝38歳：

左兵衛督を辞して上皇の院に務めることを希望して認められる一方、正三位。中納言に昇進し、

・・・・・・ 824＝39歳：

宮内卿に任じられるが、結局、嵯峨院に奉仕し続けるうち、

・・・・・・ 828＝43歳：

空海が彼から譲り受けた私邸に綜芸種智院を設置している。*前中納言から直接大納言に異例の昇進で、天皇の政庁に復帰、藤原緒嗣・良岑安世とともに、政治の建直しに全力を傾注、

・・・・・・ 830＝45歳：

嵯峨朝から引き続き修訂が進められていた「弘仁格式」を撰上。

・・・・・・ 833＝48歳：

仁明天皇即位後、従二位に進み、皇太子恒貞親王の太子傅に任じられるが、

・・・・・・ 834＝49歳：

どういうわけか、右大臣の地位を清原夏野に奪われ、

この間、娘三君への求婚の手紙を送ってきた小野篁の文才を認めて、三君を篁に嫁がせたという。

最後の遣唐使 838＝53歳：

ようやく右大臣に昇進し、太政官では式家の左大臣藤原緒嗣に次ぐ地位にまで昇るに至って、

最終遣唐使帰 839＝54歳：

没した。没後、従一位が追贈された。

・・・・・・ 840＝55歳：

井上辰夫「嵯峨天皇と文人官僚」、